

# レナ川の思い出

笠原啓一

今回初めてシベリアへ行った。私を強く行きたい気持ちにさせたのは、昨年11月に伊豆沼より南へ10km離れた蕪栗沼で見つけたオオハクチョウの足輪である。これは赤と黄で、レナ川より東へ1000km以上、北緯70度のインジギルカ川流域で付けられた標識鳥で、しかも日本国内では1羽だけの発見であった。

2月下旬に以前からの念願であった宮城県南の大河原蔵王町での総会・研修会で、ロシアのサハ共和国ヤクート生物学研究所より日本白鳥の会へ依頼があった合同調査が同意された。

5月に入り、松井会長より電話があり、レナ川調査に一緒に行かないかとの誘いがあったが、即答できなかった。実は家業のこと、家族のことで、本当は行ける状態ではなかった。この事を家内、父、母には話さず、息子に話したら、父さん行って良い写真を撮って来いとのことでした。息子は一昨年にサハリンへ行き、少しはロシアのことを知っているためか、良き理解者であった。

6月に入り、ビザ、写真、パスポート、アンケート等で少しずつ具体的になったと思ったら、旅行日程等がつかめず、これは没になると自分なりに思っていました。

7月初めの出発という予定表が1週間前にファックスで入り、計画が現実となり、本当に行かなければということになり、家業を2週間あけることのお得意様へのお知らせ等で出発前日までかかった。親、妻へは出発3日前に話しました。大変な驚きで、父親は腰痛がひどく、動くのもひどい状態で涙をこぼされました。

2週間ない間のことは、全て皆さんに通しておいたと話し、無理することはないと言い聞かせました。出発前夜、息子に手伝ってもらい、ポストンバック、カメラケース、その他2個に必要なものを入れた。前もって何も準備していなかったのも、夜9時より午前2時すぎまでかかった。北は寒いとの頭で荷を詰め込み、1時間ほど布団に入ったが眠れず、早朝4時すぎに車で新潟へ向かった。一睡もしなかったのも、運転がつかなかった。昼前の11時すぎに新潟空港に着いた。昼すぎころに、皆さんに会えました。

空からの海外は初めてです。荷物が4つにもなり、本当はもっとあったのですが、車に一部残しました。一昨年サハリンへ船で行ったとき重量は関係なかったが、空は別であった。知識不足であった。荷物を出すとき、超過料金を金井さんに立替えていただき、エアロフロート機で15:30に出発し、2時間弱でウラジオストクへ着いて、そこで超過料金100ドルを支払った。発着でいつも料金を払うのは、おみやげも買えなくなると思った。

ウラジオストクに1泊し、翌日に2,000km以上離れている北のヤクーツクへ出発したが、その時も超過料金をループで支払、不安がますますエスカレートし、ヤクーツクに着いてもかと思ったが、

着いたときにはその心配はなかった。気が少し楽になった。ウラジオストクからヤクーツクまで2時間半以上かかった。上空は晴れで、下を見ると平原がずーとであった。飛んでいる高度より少し低い所は一面に鱗雲のように見え、遠くは雲がもり上がった氷山のようなようであった。ヤクーツク近くなると、レナ川が見られた。その川の上空に雲はなかった。今まで見てきた雲はレナ川より発生した雲ではないかと驚いた。その後30分ほどでヤクーツク空港へおりた。空港はウラジオストクより大きく、かなりの数の旅客機があった。日本より 3,000km以上離れた北へ着いて、寒いどころか、真夏で30℃はあり、内陸性の気候の所と聞かされた。着いて古い出口から出たら、現地の皆さんが待っていて、ロシア人かと思ったら、我々日本人と同じ人がいて、また驚いた。先住民族のヤクート人だそうでした。金井さんに聞いたら、昨年インジギルカ川でオオハクチョウに標識をつけたメンバーで、ヤクート生物学研究所の皆さんと聞いて安心した。現地の研究者の車で一路ホテルへ行き荷物を置いてから、研究所へ行き、夜は研究者との歓迎会であった。

翌日は皆さんと研究所に行き、調査範囲の打合せと市内の博物館見学であった。ヤクート（サハ共和国）は鉱物資源の多い所で、ダイヤモンド、金、石炭などの標本の木箱に小指大のダイヤモンドが10個ほど入っているのや、金の塊などを見せられ驚くばかりであった。またマンモスの化石は日本ではテレビで見たことがあったが、実物の大きさにも驚かされた。その後、先住民族のシンボルへ案内され、市内を車でまわったが、ロシア人は少なく、先住民族のヤクート人が多く、日本人と変わらない、親近感があり安心した。

ヤクーツク3日目にレナ川をチャーター船で200km以上下ることになった。出発する川岸では市民の皆さんが短い夏を川で泳いだり、日光浴でいっぱいであった。川を15時間程かけて下ったが、途中岸には民家はまったく見られず、夜中の時間でも明るく、川を下っている感じがなく、まるで海を進んでいるようであった。昼近くにサンガールという町に着いて、金井さん、藤巻さん、ヤクート研究所のニコライさんは、調査の打合せで空港へ行った。残った我々は現地の車高の高いボンネットバスで飛行場、サンガール、レナ川が一望できる丘陵へ行き、船に戻った。昼すぎよりまたサンガール空港へ。古びた所で、滑走路も土で、乗る飛行機の翼が2枚で、戦前の飛行機かと思った。これでレナ川流域50km、幅10kmの白鳥調査に出た。3時間程見回って、最北部の中洲の中の湖に2羽、3羽と白鳥が見られ、またクマなども見られた。しかし、出発前に期待したほどは見られず、本当に数が少ない所であった。空から見た1～2羽でもよいから写真に撮れたらと祈ったものです。

空からの調査から戻り、船で夕食後にサンガール港を離れ、レナ川を下った。40～50kmは下ったと思った。日の入りは午後11:30とかで暗くはならず、日の出は午前2:00ごろであった。船の後部で休んだ。太陽が出て、同乗したロシア人の家のある中洲で朝食。そこではヘラジカの肉やチョウザメのスープが出たが、油っこくなかなか食べられなかった。その中洲のある所は砂ではなく、石ころで、歩いてみるとめのうの原石が多く、記念にとった。管理官の住居や今作っている管理棟などを見てまわったが、蚊が大発生で歩くのも大変であった。顔、手等を刺されてひどい目であった。網も持っていなかった。八木さんの黒いセーターに数十の蚊がついていた。

再び川を下り、中洲へ船を着け、ベースキャンプにした。クッチャロ湖の小西君のナビで調べたら、北緯64° 35′、東経125° 20′であった。ここからボートでニコライさんや船長の案内で4日間毎日中洲の湖を見てまわったが、白鳥は見られず、日々が過ぎ、空から見た現地へ行けなかったのか少し

らだちも出てきた。全て現地ではニコライさんにおまかせであり、1分1秒この時を大切に心と言いつけました。ボートで中洲の中の湖を見てまわっても、コアジサシ、カモ、シギのファミリーがいくらか見られただけで、鳥は少なかった。空から見たこの地はすばらしく良い環境でありながら、と強く思った。19, 20, 21日と1日に1回は中洲の湖をボートで案内された。漁業管理棟、密猟アジトなど中洲を歩いていると、蚊がかなり多い。ネットを被らないと歩けないような所でヘラジカ、クマ、オオカミの足跡があった。川が凍るまでこの中洲（島）で過ごすのかと思った。息子の幸弘から借りた温度計は26℃をさしていた。冬には-50℃まで下がるとのことでした。川は全面結氷して初めて動物たちは移動するのかと考えさせられた。21日は早朝より雨であったが夕方に雨がなかったので、ボートで湖を見回ったが、ニコライさんと八木さん夫婦のボートが2~3時間たっても戻らず、安否を気づかした。4時間程たってから雨の降りしきる中を無事に戻ってきた。八木さん夫婦は雨の中で中洲の湖でオオハクチョウを見てきたとか、ずぶぬれであったが、元気で戻ってきたので、皆は安心した。雨の中を歩いて白鳥を確認したと聞いて大感激で、仲間のうち1人でも見られたことは全員の喜びであった。とにかく無事でよかった。

21日昼ごろにヘリの音が聞こえた。救助に来たと思えた。今までレナ川の水を飲んでいたので、これで助かったと思った。予定は1日早くなり、船は今夜のみで、今日来たヘリで再度調査へ出たあと、同じヘリでヤクーツクまで帰るとのことであった。家を離れて10日も過ぎ、家族のことや父親のことなど昨夜より夢にまで出てくるようになった。心配の日々でした。

翌日は曇り空でヘリが2時間程遅れて来た。すぐに乗って、以前と同様の地を見て回った。八木さんが見た所に白鳥はいたが、人工衛星発信機を付けたくても降りられず、ベースキャンプへ戻り、その後すべての荷物を積んで、ヤクーツクへ向かった。2時間程で着いて、前と同じホテルへ行き、泊まった。

翌日は早朝よりヤクーツ生物学研究所へ出向き、今回の2度の調査結果のまとめをした。時期が遅いとのことで、以前の調査でも12か所のみとのことであった。昨年標識を付けたインジギルカ川やコリマ川流域ではオオハク、コハクとも多く、コリマ川流域では1km<sup>2</sup>あたりにコハク35羽の密度で見られ、一極集中の傾向で、レナ川流域はとくに減少しているのではないかということであった。

初めて繁殖地での合同調査に参加し、我々以上にニコライさんをはじめ、多くのロシア研究者の皆さんが真剣に取り組んでいることは大きな驚きであり感動でした。白鳥のいた写真は撮れなかったが、この地でも多くの問題があり、皆さんが越冬地（日本）以上に白鳥のことを思っていることに心打たれました。近い将来、日本に招待し、各越冬地の現状を見てもらいたいと強く心に残った。

今思えば、ヤクーツ研究所の調査報告のとき、昨年赤・黄色の足輪をつけたオオハクチョウを国内唯一見つけた自分と付けた人の出合いは今回の旅に残ったことである。また寒くなると戻ってくる白鳥たちと、以前以上に強いきずなで結びついた旅であった。色々とお世話いただいたヤクーツ研究所の皆さんに感謝し、また家族にたいしては無理なことを理解してもらったことに感謝する次第です。